

発行日：平成14年7月1日

発行：伊丹市文化財ボランティアの会

発行所：伊丹市千儀1丁目1番地

伊丹市教育委員会事務局内

火曜会通信

<巻頭言>

『西鶴と伊丹』

柴田 久子

「あたご火の かわらけなけや 伊丹坂」柿衛文庫の前の産業道路沿い100m程北にこの井原西鶴の歌碑がある。

『日本山海名産図会』(1798刊)の「摂州伊丹酒造」の項に旧暦7月24日に行なわれる愛宕祭について「愛宕火とて伊丹本町通りに燈を照らし好事の作り物など營み・・・酒屋の蔵立て等の大なるを見んとて四方より群集す」とあり、この日を境に新酒造りが始まられた。この祭礼の行事のひとつとして伊丹坂付近で土器(かわらけ)投げをしたらしい。この頃、15才にして俳諧を志した西鶴は師である西山宗因について伊丹の也雲軒を何度も訪れていた。その折にいきあわした愛宕祭を詠んだものと思われる。

当時の伊丹の富裕な商人達は酒と俳諧に浸りながら金にあかして茶事、和歌、連歌、音曲鳴物など、すべて一流の宗匠家元に習うという贅をつくした生活ぶりであった。西鶴は大坂に劣らぬその生活ぶりに驚き、つぶさに観察しそれを基に町人の人情や才覚と勤勉で成長していく商人の話を「西鶴隠留」として発表した。

同書の巻一に「津の国のかくれ里」として伊丹の酒造家の放蕩息子の生活ぶりが描かれている。大坂道に面した有岡公園の一角にも「富貴の家にうまれ出るは、前世の種也」ではじまる一節が刻まれた石碑が建っている。

先日「摂津名所図会」で堂島の米問屋のページを開いたところ、西鶴の『日本永代蔵』巻一の三の「北浜に縛の神を祀る女」に出てくるこぼれた米を拾い分限(金持)になった女性の姿が描かれていた。一瞬西鶴がこの絵を見て作品を思い付いたのかと考えたが「摂津名所図会」は寛政十年(1798)頃に刊行され、西鶴は寛永十九年(1642)に生まれている。この時も西鶴はこの女性達をつぶさに観察していたのだろう。このような光景が150年余りも後に書かれた「摂津名所図会」の頃にも続いていたのだろうか。それとも作者が西鶴の本を読み想像して書いたものなのだろうか。

西鶴は結核を患い元禄六年八月、大坂の錦屋町で52才で亡くなっている。祖父や妻達の眠る上本町4丁目にある誓願寺に葬られた。同じ年の9月17日に也雲軒で池田宗旦が亡くなっている。西鶴の13回忌の法要には伊丹から鷺助、上島青人、森本百丸らが追悼句を捧げている。西鶴はこの伊丹と意外な程深い関わりを持っていたのである。

参考文献：西鶴文学地図/大谷晃一

主な行事予定(8月から10月)

◇ 定例会

8月20日(火)	研究発表 「村の歴史・神津村」第1回	中央公民館
9月10日(火)	研究発表 「未定」	中央公民館
10月 8日(火)	市外研修事前勉強会 「宇治平等院・他」	中央公民館

晴天に恵まれた5月28日に火曜会メンバー37名と市教委2名はマイクロバス2台に分乗して和泉市へ、まず大阪府立弥生文化博物館に到着し学芸員に館内の説明をして頂き、平成14年春季特別展「青いガラスの燐き」の会場へ。

展示は「卓越した弥生墳墓」「特色ある大古墳」「暮らし・生産・交流の世界」というコーナーで構成、京都市北部の遺跡から出土したものを中心に、重要文化財96点を含め約700点を一堂に展示されており大変みごたえがありました。

多くの遺物の中で今も色あせることなく完形で出土された「青いガラスの腕輪」透き通った青さが美しく目に残っています。そのうえ、「青いガラス玉を連ねた首飾り・腕飾り」「ヒスイ勾玉と大小の小玉の組み合わせて連ねた首飾り」は現代の我々でも身に付けてみたく、同じものが欲しいとすら思うぐらいでした。古代の人々はとてもおしゃれだったのだと感心いたしました。

常設の第1展示室では弥生文化の展示、こちらは映像と模型でとても判りやすく見学できました。第2展示室では池上曾根遺跡から出土した実物の史料が展示されていて見ごたえがありました。少し時間が足りなかった感がありました。5分程離れた史跡公園に移動し復元された「いずみの高殿」に目を見張られます。大型堀立柱建物の「いずみの高殿」と大型くり抜き井戸「やよいの大井戸」この建物を中心に環濠集落が形成されており、遺跡の総面積は60万坪と推定されています。広大なこの地で紀元前50年頃の人々が暮らしを営んでいたのだということが想像され、復元された竪穴住居に弥生人がいるのではとふと錯覚さえ覚えてしまいました。

次に堺市へ。少しおそめの昼食タイム。堺市博物館では学芸員の方から館内の古代・中近世・近代までの郷土の歴史が再現されている展示の説明を詳しくして頂きました。その後、自由時間各々が館内を見学したり、大仙公園を散策したり、茶室「仲庵」にて抹茶を楽しんだり、世界最大級の墳墓「仁徳陵」のスケールを確かめるために歩いたり、また足を伸ばして南宗寺にとそれぞれ有意義なひとときがござりましたでしょうか？

時間に押されあわただしかったですね。次回はもっとゆっくりとこの地を訪ねてみてください。また違った出会いがきっとありますから・・・・。



<市内史跡めぐり・ガイド支援>

5月17日	昆陽西中田自治会	参加者 30人	C (金) グループ担当
内容	岡田家/石橋家/有岡城趾/墨染寺など		池田利・杉本・片山・浜野

<ウォーキングホリデーでの支援>

5月26日	3市1町共同事業	参加者 約450人	E (日) グループ担当
内容	伊丹廃寺/昆陽池公園/ポイントガイド	寺谷・藤本・斎藤・池田・浜野・坂根	

<郷町館ガイド支援>

6月25日	関西RPの会	参加者 23人	A (水) グループ担当
内容	岡田家ガイド		日野・難波・西口・片山・森本・服部

〈リレー隨想〉

『歴史大嫌い人間の歴史的挑戦』

後藤 昌弘

新しく仲間入りさせて頂きました後藤です。よろしくお願いします。総会の時の自己紹介でも申しましたが、私は大の歴史嫌い人間でした。どうも年代を覚えるのが苦手だったからかも知れません。

学生時代から日本史、世界史とも、必要最低（少）限度部分以外は避けて通っていたように思います。学問としての歴史学や考古学、遺跡発掘調査作業等、あんなに辛気臭い作業がよくできるなと思ってきました。しかし、学問やそういった仕事や職業を否定するものではありませんでした。俺にはもっと違う興味のある事があるのだといった感じであったように思います。とはいながら例えば学校等の歴史史料を収集したり、社会人になってからもその時々の携わった仕事に歴史的興味を持ってきたのは今振り返ると不思議な気もします。

大学や仕事も理系に進んだ人間にとて共通点も感じないではありません。理系文系双方とも探究する心には、歴史的事実の上にたっての探究・研究も重要な部分だと考えます。歴史考古学の分野では特に古い事項については推定の域からの話が多いとは思いますが、推定にしろ本当らしく治まっていくところにすばらしさを感じます。奥の深さがようやくわかつてきたこの頃です。

子供や孫にも、たまには歴史の話をする必要性を感じつつ、また住んでいる所の昔を知る必要性・願望から、段々深みにはまりそう・・・時すでに66才、遅すぎる気づきます。まあのんびり生涯学習です。これも生きていた歴史的事実です。今後ともよろしく。

次回は同期の桜で谷光 洋子さんにお願いします。

『菅原道真公と仁徳天皇陵』

西口 征子

その昔、朝鮮半島で新羅国と百濟国が争い、百濟国が敗れ数多くの人が日本に渡来したと。それ以前にも多数の人がやってきているが。菅原氏は土師（はじ）氏の流れをくむ。『日本書紀』に野見宿禰は土師連等（はじのむらじ）が始祖なりと。土師氏とは陵墓の造営や埴輪の製作に従事し、葬儀や祭日の吉事に預り、また陵墓の管理に当たっていたと考えられる。

この土師氏が奈良時代末から平安時代初期にかけて改姓したという。もともと土師氏には四つの支族があった。「其の土師氏に惣って四腹あり その一つは毛受（もず）腹なり大枝朝臣と賜ふ 自余の三腹は或いは秋篠朝臣に従ひ 或いは菅原朝臣に属す」と。

『続日本書紀』より 毛受腹とは今の堺市の仁徳天皇陵古墳の他、百舌鳥古墳群の付近に居住した一族であり、後に山城国乙訓郡の大枝に移り住んだ。

桓武天皇の母君、高野新笠がこの氏族出身である。ちなみに仁徳天皇陵は「百舌鳥耳原中陵」と呼ばれている。改姓後の名を取って菅原腹は菅原寺（喜光寺）菅原神社付近、つまり垂仁天皇陵付近、菅原神社は延喜式内社で祭神は天穗日命、野見宿禰、菅原道真公である。

秋篠腹は日葉酢姫命（ひばすのひめのみこと）陵や成務天皇等のある秋篠寺の一帯に居住し佐紀盾列（さきたたなみ）古墳群の築造に関与した集団のことであろう。

残りの一腹はどの支族を指すのか、おそらく応神天皇陵古墳のある古市誉田（ふるいちこんだ）古墳群のある藤井寺市から羽曳野市辺りに根拠を持っていた一団であろう。次回は塙井 陽子さんへ

参考 「天平の僧 行基」千田 稔著

□ お知らせコーナー□

□ ガイド研修日程

郷町歴ガイド研修

7月16日(火) 9.30 スワンホール集合 内容 グループ別研修状況発表

9月17日(火) 9.30 中央公民館集合 内容 研修総括

市内史跡ガイド研修

7月23日(火) 10.00 昆陽寺集合 内容 昆陽寺見学と解説

市老連ガイド事前研修 (雨天順延)

9月24日(火) 10.00 三軒寺広場集合 内容 コース下見・役割分担

□ 分科会活動について

第1部会(村の歴史) 第2部会(街道を歩く)は、ガイド研修日程に当てているため休止していますが、10月度よりの再開に向けて具体的な事項を幹事会で討議・検討をいたします。今までの実績や反省すべきことがらも多々あると思いますので、会員皆様の率直なご意見・ご叱正を、会長または幹事あてお寄せいただきたくお願ひいたします。

集むめのあかむ集む

□長柄橋の人柱□

松本 繁

大阪の淀川に今もかかっている長柄橋という橋がある。むかしはこの橋はいつも流されていた。そこで新しい橋を架けたかったんやけどどうしても途中で流されてしまうんや。

そこでな「着物の破れたところに横つくろいをしている人がな人柱になれば橋は架かるはずや」と言い出したひとりの男がおった。大勢集まった人の中でそういう着物を着ている人は誰ひとりとしておらんかったんやて。

ようみたら、その言葉をいいだした自分自身の着物にその縫いがあったんやて。ほんで結局その人が人柱になったというわけ。でその橋は無事に完成したんやて。人柱にされた人の娘が嘆き悲しみ「鳥も鳴かずば 射たれもしない 父は長柄の人柱」という皮肉のこもった歌が読まれてんて。今もこの歌の石碑が東淀川区のほうに残っているんやて。

出世酒よこ目に見つつ利酒す
屋号上品寺屋しもみせ

川風になびくともなし 逆光に
銀の鳥立つひとつ足にて

ふいに来て部屋の最中にちんまりと
位置を占めいる夏の孤独が

ほめられず うとまれもせず
七月の花下闇にかがまりていつ

「生き生きときどす痛みはせんなし」と
う母に吾が膝さすられており

大輪の花におくれて梅雨晴れの
深山にすがし白シチゲンカ

投稿コーナー

難波 寿美

